

第8回堺市中学校給食検討懇話会 議事要旨

日 時	令和2年12月18日(金)午後3時00分～午後5時00分
場 所	堺市役所本館3階第1・2会議室
出 席 者	委員：鎌田委員、勢戸委員、田中委員、植木委員、吉原委員、仲野委員、石山委員、中村委員、池田委員、苅野委員、八竹委員、富永委員 事務局：教育委員会事務局職員 傍聴者：0名
案 件 等	1. 開会 2. 協議事項 ① 中学校給食管理運営に関する全般について 3. 挨拶 4. 閉会
資 料	(1) 次第 (2) 中学校給食管理運営に関する全般について
会 議 内 容	
1. 開会 (鎌田座長) 今日の協議事項は、中学校給食管理運営に関する全般についてということです。それから、今日は、最後の懇話会になりますので、お一人お一人順に発言していただいて、ここだけは言っておきたいこと、あるいは言い忘れないように、何もない方は全体を通しての感想で結構ですが、未来に向けて中学校給食が堺市でどのように進行していったほしいかという願いも込めていただけたら一番いいかと思います。とにかく全員の委員の方がきちっと発言する機会があるということが大事なことだと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。 今日の協議内容「中学校給食管理運営に関すること」というのは、大事な問題で、ここがしっかりしなければ、給食センター、学校の関係プレーも難しくなり、結果的に、子どもたちに迷惑がかかるところです。では、事務局から資料の説明をお願いします。 2. 協議事項 ① <u>中学校給食管理運営に関する全般について</u> 【資料1を基に事務局が説明】 (中村委員) 私、当初から人の配置をお願いしたいということを申し上げてきましたが、この間全員喫食制の給食を行っている小学校の状況を確認しまして、いまだに食物アレルギーを有する子どもへの除去食の人為的なミスというのが気になって仕方がないです。栄養教諭が配置されて	

いない小学校では、管理職がやらなければいけないということなのですが、学校の規模によって教員の数も決まっていますし、教員が比較的少ないところは管理職も教室へ入るということも必要だと思います。また、小学校低学年の場合は助けが必要になる場合が多いので、そちらにも応援に行かないといけないというようなところで、人為的なミスが起こってしまいやすいというようなことを聞いています。

本校は、今年度修学旅行に行く前に、食物アレルギー対応を確認してみたところ、アレルギー症状の重度な生徒がおりました。その生徒に関しては教員が特に注意をしながら確認し、念のために泊まるホテル側に確認してみると、食物アレルギー対応ができていなかったというのが事前に発覚して、誤食等は未然に防げましたが、これが毎日起こるのかということが非常に心配です。栄養教諭が配置されている学校では、除去食の人為的なミスがやはり少なくなっているのかどうか、ゼロだったらいいのですが、どうしてもそういうミスが起こってしまうところを非常に気にしておりまして、ぜひ中学校給食を始める中で、中学校全校に栄養教諭の配置をお願いしたいということを申し上げたいと思います。

(鎌田座長) 除去食、アレルギーの問題、石山委員や仲野委員、もしご意見があれば、関連して述べていただけたらと思うのですが、いかがでしょうか。

(石山委員) 身近なところでは、アレルギー対応の除去食は、今本校にいる生徒たちは自分で除去できる子、例えば卵アレルギーだったら最初から給食を頼んでいないとか、そういうことなので、今言われたようなことが心配というのは、修学旅行等の場合だけです。今回の修学旅行は非常に徹底していただいて、全然違う食事を1人ずつ渡すということで、中身についてもきちっと確認してできていました。しかし先ほど中村委員がおっしゃいましたように、それが毎日になると大変ということで、私も、最初から言わせていただいていた栄養教諭の全校配置をぜひともお願いしたい。除去食については、今のところ私の学校ではないのですが、今聞いて、確かにそこは心配な面の一つと思いました。

今日は最後ということで、給食の前にランチサポートといって自分で毎日頼むという制度がスタートして、その頃から温かいものが食べられるし、子どもたちも楽しみにしていました。選択制給食が始まって、私自身、毎日楽しみにしていた一人ではあるのですが、この会に参加させていただいて、非常に勉強不足だったと思いました。ただ単に毎日給食がおいしかったらいいという感じで、みんな食べたらいいのと思っていたのですが、今の除去食のこと、アレルギー対応や異物の混

入とか、この間勢戸委員から食中毒も後を絶たないというようなことを聞いて、私自身も身近に感じていく必要があるとすごく思いました。私の学校には栄養教諭が配置されているということで以前から話をさせていただいておりますが、非常にきめ細かく、例えば給食に髪の毛みたいなものが入っていたとか、そういう対応がすっとできて、委員会にもすぐ報告ができる。前任校には栄養教諭がいなかったので、当時担当であった私が全部やらないといけないから、どうしても後手になったり何か抜けてしまったりというのがあったので、栄養教諭の全校配置はぜひともお願いしたいところです。

おいしい給食のことであるとか、池田委員がおっしゃっていた、食べ物は体を育てる、食べ方は心を育てるということを、我々もこうやって代表で懇話会で話を聞いているので、まず自分のところの学校に伝えていければ、食育はどんどん広がっていくのではないかと考えています。

中学校の現場、キャパシティの問題もお話しさせていただきました。今、教室には大型ディスプレイが入ったり、今回GIGAスクール構想で、一人ひとり学習端末を整備してもらったのですが、その保管庫が随分はみ出ていることもあるし、40人学級ということで、支援学級の生徒を入れると40人を超える教室もあるので、配膳できるのかという心配もあります。この間、国のほうで、小学校を順次35人学級にしていくということで、一気に30人にならないのか、と思っていたのですが、一歩進んだのではないのでしょうか。中学校も1クラスの生徒数を減らしていただくと学習の面でもいいと思いますし、中学生は体も大きくなっていきますので、配膳のことも含めて、少人数にするようなことも順次やっていただければいいと思っています。

(鎌田座長)

栄養教諭さんの全校配置の問題、それから、アレルギー除去食の対応の問題、こちらは子どもの命に関わります。ミスはどんなところでも起きるわけですが、起きて許されないミスというのが中にあるって、むしろそこにすぐ行きそうな、大変なことになりかねないことですが、もう1つ、施設のキャパシティの問題、これも本当に大事なことです。

事務局の方も、今出ている問題については、基本こういうふうな方向で考えているということは、後で言っていただきたいと思います。

栄養教諭さんの全校配置については、この懇話会を通して、この点は強調してきてもらっているわけですが、栄養教諭のお立場からご意見をいただけたらと思いますが、いかがですか。

(八竹委員)

これまでの会を通して、校長先生方の不安に思っておられるのが除

去食です。今日もまたお話が出てきましたが、私も今回痛感したのは、修学旅行の付き添いに先日行ってまいりまして、行く前に食物アレルギーを有する子の調査を行ったのですが、中学校は選択制給食なので、結局今の3年生で、食物アレルギーを有する生徒は給食を注文していないので、それまで私が給食を通して関わる事が少なかったのですが、修学旅行をきっかけに一から関わることになったのです。いろいろ聞き取っていったら、結構な人数がいて、症状が軽い人は書面だけでやっていたのですが、実際付き添いで修学旅行に行くと、聞き取っていない子から違うことを聞いたりして、かなりきちっとやっていかないとだめだというのを実感しました。聞き取りも、栄養教諭なら聞き方のコツみたいなものを知っているのでもうまくいくのですが、栄養教諭以外の人がやるのは結構大変なので、今後栄養教諭が配置されなくても、何らかの対応をしていかないといけないというのは実感しました。

前に、小学生と違って中学生はしっかりしているというお話をさせていただいたことがありましたが、しっかりしていることはしっかりしているのですが、その反面、自己判断でいろんなことをやっていくというのも分かりました。宿泊先とかでも、勝手にホテルの人に、「僕は食べられると書いていたが、いつも食べていないから、あっちに換えて」と言ったり、そういうことを勝手にやっていたりしましたので、生徒一人ひとりチェックをしていく人が必要ということが分かりました。今後、実施に当たって、栄養教諭が配置されない場合どうしていったらいいのかというのも考えていかないといけない課題だと思いました。

(仲野委員)

毎日小学校は除去食対応を行っています。マニュアル化も随分されていて、調理場で除去食対応の子の献立表と除去食を担当が受け取り教室に持っていく。教室での配膳も、その子の分を一番に配膳して、献立表をきっちりと見て、担任と間違いがないかを確認して食べる。そういう約束ごとは一応できているのですが、やっぱり事故がゼロにはなっていません。

本校においても、担任が普段はきちっとやっているのに、たまたま除去食は小おかずだという勝手な思い込みをしてしまって、実際その日は大おかずが除去食だったということがありました。幸い大事には至りませんでしたが、本来あってはならないことです。思い込みがあるために間違ってしまう。そこには最後の確認がきちとなされていないという事実があります。マニュアル化されていても、しっかり意識をしておかないと、慣れてきたときに危ないということを私も学びました。

栄養教諭がいると、普段から職員会議等で啓発をしたり、何かあった

ときにはすぐに職員に連絡したりなど、きめ細かい対応があり、とても安心しています。ですので、栄養教諭が全校配置されることが絶対望ましいと私も思っています。しかし、栄養教諭が全部ついてできるかというと、それはできないので、多忙感のある中ですが、中学校の先生方が、食の大切さや中学校給食の意義を理解し、子どもの命に関わるからだからここは頑張ろうというふうに思ってくださいることが1つ大事なところです。管理職の先生はその辺は大変で、悩ましいところだとは思いますが、一番身近にいる、最後に子どもの口に入るときにそばにいる担任が、一定意識を高く持つておく必要があると感じています。

(鎌田座長) 勢戸委員、田中委員、アレルギー除去食の対応で、今出ているご意見をお聞きになられていて、堺はかくあるべきというようなことがあれば、教えていただけたらと思います。

(田中委員) 私、病院勤務で、病院給食を30年ほどやっていまして、食物アレルギーの患者さんも多々入ってこられます。病院には100%管理栄養士がおりますが、それでもヒヤリハットは起きます。どうしているかというと、今おっしゃったように看護師さんに管理栄養士が一生懸命協力を依頼するというしかないです。だから、学校に管理栄養士がいなくてどうしようもありませんので、まず栄養教諭がいる。その栄養教諭がひたすら先生方に教育と言ったら語弊がありますが、指導をして、「事故が起きないように」というのが一番現実的な方法だと思います。それでも、100%起きないかと言われたら、そうは全く言い切れないのですが、私の体験から言いまして、できる努力はそこかなという気はします。

なおかつ、先生と栄養教諭さんが仲良くなってください。仲良くなないと、やる気を起こしてくれません。ですから、私は看護局の言うことは真剣に聞きました。そのかわりに、こっちの言うことも聞いて好意的にやってくれました。例えば、給食に髪の毛が入っていたということで患者さんに謝りに行くときに、看護師長さんがついていってくれると、患者さんも穏やかに怒ります。できるだけ先生方とコンタクトをとって、意思の疎通をして、仲良くなった形で、先生方も栄養教諭さんの顔を思い浮かべながらチェックしてくれると気合も入りますので、それが一番現実的だと思います。ですから、まず学校に1名配置ということが基本だと思います。

(勢戸委員) アレルギーの対応に関してだけだと、栄養教諭を配置し、もし対応させたら、何かあったときの責任がその栄養教諭にいつってしまうので、そ

れを重点的にというのは少し趣旨が違うと思います。もともと文科省の方から『学校給食におけるアレルギー対応指針』というのが出ていますので、本来は就学時にどんなアレルギーを持っているかというのが全て医師の診断のもとに学校に届いているはずですが、それがひょっとして堺市はできていないのかと少し不安になったのですが、指針をもとに各学校で給食を提供しているところにおいてはアレルギー対応委員会というのが設置されているはずですが、それは栄養教諭の在籍の有無に関わらず各学校にあるはずなので、それが今ないというのが問題です。かなり遅れていると思います。平成20何年に出ていますから、今中学校は選択制給食だといっても、給食として提供しているのであれば、きっちり学校にアレルギー対応委員会を設置して提供しないと、給食として提供している責任が持てないのです。

ただ、これは皆さんおっしゃっていますように命に関わることで、無理をして給食を提供することはないというのが指針の中にも触れられておりまして、例えば人員的に無理があるとなったら提供しないようにというのもその中に書かれております。確かに皆と一緒に給食を食べさせてあげたいというのがあるのですが、一方では命に関わるものですから、無理はしないというのが前提です。それでもやっぱり出てきます。もっと言うと、給食を提供するのであれば、もし食物アレルギーを有する子どもがいたらエピペンを持っていると思いますから、何かあったときに打てますか。そういう研修もしていないのではないかと思います。

(仲野委員) エピペン研修は毎年やっております。

(勢戸委員) 余り無理をしない。そこは文科省が保証していますから、無理をする必要はない。安全なものを提供してあげればいいと思います。

(鎌田座長) ここまでの各委員の意見を聞いておられて、保護者のお立場からどうでしょうか。

(植木委員) 長男の同級生のご近所の子がアレルギーを有してしまっていて、もちろん小学校へ入るときに学校の方には保護者として必ず伝えなければいけないことはあるのですが、それでも最初のうちはその子はお弁当を持ってきました。除去食に関しては、保護者さんは少し不安なところもあるみたいで、そのあたりは自分のところで対応しているというのはありました。今勢戸委員が言われたみたいに、無理して提供する必要はないと思います。無理をし過ぎてヒューマンエラーが起こらない

とは言い切れないので、何かあったときに命に関わるとかとなるのであれば、一步引いて、提供できないものは提供できないと言ってもいいと思います。それも安全のためというふうに考えました。

(鎌田座長) 大事なところは命ですからね。

(植木委員) 安全という意味では、提供しないことも一つの方法であると今思いました。

(吉原委員) 保護者は基本的に安心したいです。学校に行って、無事に帰ってきてくれることが親の願いなので、国の方針で全校に栄養教諭を配置する必要がないとかあるとかを抜きにして、安心という側面から言うと、全校に栄養教諭が配置されているのが、そこで何か起こったら責任がその方に来るとするのは目に見えて分かりますが、やっぱり安心できる大きな材料なので、私自身も全校に栄養教諭をぜひ配置していただきたいと思います。中学校の先生に指導して対応していただくという形になるのかもしれませんが、それでもそこは諦めたくない。各市町村でもいろんな対応をして、それでもニュースに出てしまうような事故が起きています。ここは懇話会なので、そこはだめだから、人が足りないからではなくて、やはり希望としては、食物アレルギーの除去食で悲しいことが起こるのだったら、どうやって実現するのかというところで、ここはぜひ私もお願いしたいと思います。

(鎌田座長) 今日の話をもし中学校の先生方が傍聴して聞いておられるとすれば、どんなふうに感じられるかということです。例えば、もう既に小学校でアレルギーの除去というものが定着をして、そのノウハウ、ルーティンが分かっている先生が聞かれているのと、これから始まるという中学校の先生が聞かれるのと、また同じ中学校でももう既にアレルギーを持っている生徒さんがおられてその子どもさんの生活がちゃんと見えているという中学校の先生が聞かれるのと、そうではない初めての先生が聞かれるのとでは変わってくる。これは当たり前で、不慣れで経験のない、しかし責任のあることをやるとなれば、真面目な人ほど不安に駆られる。こういうところに1つずつ丁寧にこたえていくようなことが、この懇話会はこれで最後になりますが、この先堺市のチームに絶対必要になってくることなのではないかと思います。子どもさんのためにみんなで力を合わせて頑張って取り組んでいくんだと考えておられるチームには、確かに栄養教諭さんが来れば力になると思うのですが、そこが不安だから栄養教諭さんだと思っているのでは少し安

心できません。

懇話会は一貫して栄養教諭の全校配置と言っているわけです。懇話会の役割から言えば、そういう発言で立場を鮮明にしているわけですが、仮に堺市さんがすごくご努力されて実現したとしても、一人ひとりの関わる人間が問題にどう取り組むのかという姿勢を間違っておられると、元も子もなくなる。つまり、栄養教諭のせいにしてしまう。これではいけないと、聞いていて思いました。

この懇話会の委員の方々は本当にすごくて、懇話会と言いながらすごい問題解決能力があると思います。勢戸委員が明らかにしてくださいましたが、指針で、学校と保護者との関係でもってこのアレルギーの問題がはっきりする。窓口が幾つもあるわけではありません。学校と保護者という中で、そういうものが学校に届いていないといけません。本人がああやこうや言おうが、届いているものが全てという前提に立って、委員会も作って、無理して提供しないというガイドラインの枠の中で、一番大事な子どもさんの命をしっかりと守っていくということです。

こういうふうに片一方でなっているわけですが、もう片方で、そうであってもミスは起きる。結局、リスク管理の問題で、私は、これはそれぞれのチームのあり方に尽きると思っています。例えば、何かやるというときに人間関係がちゃんとチームとしてあって、これからやる若い後輩が初めてそれにチャレンジするときに、先輩が適切なアドバイス、あるいは援助、支えができるチームなのか、そうではなくて、ミスしたら脅しに近いようなことを言うってしまうのか。人間というのは思い込みやミスは起きるものだが、「でも負けない、大事なことから、子どものために挑戦します」という気になれるのかどうかは、まさに学校がどんな学校なのかということが問われることだと思います。

我々が夢見ているのは、堺の給食の問題を通して、全ての学校が子どものためにそういう前向きな、支え合う、力を合わせられるチーム学校になってもらうことです。本当にそうなってほしいと願っているところなのではないかと思います。各校に配置された栄養教諭さんが本当に力を発揮できるためにも、また、学校のリスクはこのアレルギー除去だけではなくて、いろんなことがありますので、これに対しても同様に乗り越えていけるようなチームであってもらうためにも、うちの学校はどんな学校なのか、こういうところが一にも二にも問われなければいけないと感じます。

事務局のほうで、こちら辺で何かコメントできることがありましたらお願いします。

(事務局)

食物アレルギーの除去食対応について、補足説明させていただきます

す。

勢戸委員がおっしゃった平成27年に出ている文科省の指針ですが、校内にアレルギー対応委員会を設けるということです。改めてアレルギーの対応の委員会を作っている学校もありますし、学校給食の安全面を検討する学校内の組織で、アレルギーのことを検討している学校もあるかと思います。平成24年に調布市で給食のチヂミをおかわりして食べた6年生のお子さんが給食を原因として亡くなってしまったという事故がありました。当時から、堺市の小学校の校長先生方は非常に意識が高くて、この事故があって、「これから堺市は食物アレルギー対応をどのように安全にしていくのか、堺市として除去食の対応を安全に行える方法を考えてほしい」というようなご意見がありましたので、それに合わせて、平成25年から新しいマニュアルを作って、先程、仲野委員が言っていたマニュアルについてしっかりと研修もやらせていただいていた。そんな中で、27年の3月に文科省の指針が出ました。実際に文科省の指針の部分については改めて小学校、中学校についても徹底して説明をしていかないといけないと思っています。

除去食対応については、今、中学校の先生方におかれましては不安な部分が非常にあるかと思うので、これからアレルギーの専門の医師等アレルギーの実態等の話や、全教職員の先生方にアレルギー対応で「こういうことを小学校でやっています、中学校ではこういうことをやっていきます」ということをしっかりと研修等で、伝えていきたいと思っています。

アレルギー対応の基本的なことは2つありまして、1つは、給食を提供するときにミスが起こらないような仕組みをまず作るということ、仕組みを作っても、先程、田中委員がおっしゃっていたみたいにどうしてもミスが起こる場合があります。100%防ぐような仕組みは作りますが、どうしても人間なのでミスをしたとき、食べてはいけないものを食べてしまったときに、その子どもに応じてどういう対応をしていくか。例えばエピペンを打つのか、薬を飲ませるのか、すぐに救急車で搬送するのか、個人個人でアレルギーの症状は違ってきますので、その子に合わせた対応を学校のすべての教職員で共有していただく必要もあります。今は選択制給食なので、八竹委員もおっしゃっていたように食物アレルギーを有する子どもは給食を注文しない、という選択をされているかと思うのですが、全員喫食制給食になれば、除去食でも食べるというお子さん、どうしてもいろんな食べ物を食べたら症状が出ますというお子さんにはもしかしたらお弁当を持ってきたりできないといけないということもあるかもしれません。間違って食べたときに、

個人の対応、1人ずつの対応をどうしていくかというのは、学校の中で対応していく仕組みを今後また作っていかないとはいけません。全員喫食制の学校給食が始まるまでにしばらく時間がありますので、そういうことを1つずつ中学校の教職員の方にも理解してもらえるように、我々もしっかりとマニュアルと仕組み作りをさせていただきますし、食物アレルギーについての研修を、この間にしっかりとやっていきたいと思っています。

栄養教諭の配置のことですが、確かにアレルギーの対応だけではなくて、小中一貫した食育という部分を進めていくということでも栄養教諭の存在は非常に大切だと思っています。食育推進やアレルギー対応等、栄養教諭の役割を我々がきちんと認識した上で、どういうふうに配置していくのか、こういうことをやってもらうために配置していきますというビジョンも、しっかり持たないといけないと思っていますので、今後しっかりと学校の現状を見ながら考えていきたいと思っています。

あと、教室のキャパシティの問題もあります。小学校が35人学級に変わるということです。実際に中学校の校長先生方の会議に出ると、「今のあの大きさの教室の中で給食の配膳できるのか」と言われます。GIGAスクールの端末を置く台等があったり、子どもたちも小学生に比べて体格が大きいですし、という意見も含めてです。その点については、学校給食改革室だけでなく、教育委員会全体で考えていかないとはいけませんので、こういうご質問とかいろんな意見をいただいたときは関係課ともきちんと情報を共有して、こういうご意見が出ていますというようなこともきちんと伝えておりますので、今後も教育委員会全体で情報共有しながら、対応できるように進めていきたいと思っています。

(鎌田座長)

ありがとうございます。何かつけ加えて、ご質問とかがあれば、遠慮なくお願いします。

我々思い返すと、この懇話会では、最初、給食センターをつくるに当たって、温かい人間味のあるおいしい給食の作れるチームであるようにということもかなり話をしておりました。今日はそのことに関する意見は今のところ出ておりません。多分各委員は手応えを感じておられると前向きにとっておりますが、そういうことも含めまして、中学校給食の管理運営に関して、ほかに何かありませんか。

(石山委員)

アレルギーの引き継ぎですが、栄養教諭の先生がいなくても、養護教諭同士は必ず年度の当初にはやっているはずです。その辺の伝達がう

まくいっていないところが気になるところですが、伝達自体は毎年、先生は先生同士で気になる子どもの一人一人の聞き取りであるとか、栄養教諭は栄養教諭で、アレルギーのことについて引き継ぎはやっています。それから、栄養教諭とは日頃から仲良くさせていただいています。大丈夫だと思います。前向きにいろんなお仕事をさせていただいています。

先日も、栄養教諭から「来月も給食の試食会をやっていいですか」ということでしたので、「どうぞよろしくお願いします」と返事をしました。

(鎌田座長)

石山委員が言う通り、学校の先生はみんな仲良くなかったらだめです。そうでなかったらできない仕事です。どうして報告、連絡、相談もできないのか、それは仲が悪いからです。人間関係ができてないからおかしくなっていくわけです。普通に考えれば、まずそれが大事ということなのです。

(富永委員)

食物アレルギーのことでずっと話をされていまして、中学校は初めて食物アレルギー対応をするということで、すごく心配があると思います。しかし、小学校給食で6年間ずっと食物アレルギー対応をさせていただいており、担任の先生はもちろんですし、保健の先生とか、いろんな先生方がその子のアレルギー症状をよく理解されていると思います。中学校に上がるときには、それをそのまま中学校に申し送っていただくように小中連携をさらに進めて、年度の最後のときに6年生の先生が中学校に来て、「この子はこんな子ですよ」というのをお伝えするときがあるのですが、そのときに給食担当もアレルギー情報についてきちんと申し送りをするなどしておけば、6年間での除去食の対応など詳しいことも分かりますので、小学校と中学校が連携することがとても重要だと思います。

先日、他市の中学校に見学に行きました。栄養教諭はセンターに配置されていますので学校にはいないのですが、毎日職朝で「今日の除去食対応はこの子です、食べない給食はこれです」というのを言われているというのを聞いて、すごいと思いました。朝礼は先生方全員が聞いておられるので、すごくいい取組だと思います。毎日行うことで、この子はこんな食物アレルギーがあるとすべての先生が共有されているというのも素晴らしいことです。また、小学校は担任の先生だけが給食時間に見ているような形があると思うのですが、中学校は副担の先生がたくさんいらっしゃるの、学年全体で子どもたちを見られるという利点がありますから、その連携をうまく使って、中学校でもアレルギー対

応を教員全員でできたらいいと思います。

(鎌田座長)

私は、今の富永委員の話を聞きながら、またその前の話からも思ったのですが、給食のアレルギーの情報の共有を通して、小学校と中学校がいま一度さらに深く学習者を理解するということに本気で取り組むというものになってほしいと思います。もちろん、アレルギー除去のミスを起こさないために情報を共有しなければいけないという面があるのですが、それよりも何よりも、私たちがやっていることは、結局一人ひとりの子どもを理解しない限りできないということです。もう少し言えば、一人ひとりの子どものつらいこととか、悲しいこととか、寂しいことをしっかり理解できないといけません。アレルギーで、これが食べられないという子はある種それを一生背負って、少なくとも卒業するまではずっと背負ったまま生きていくわけです。そういう子どもだということを知らないで、頑張れとは本来言えないはずで、そういう問題として教育としては捉える機会にしてほしいと思います。小中連絡会も、「成績と問題行動はありませんか」の確認だけで終わったら困るわけです。そこに揃うメンバーも、現在だからこそ誰と誰がいなければいけないのか、そういうことをもう一回考え直さないといけない面もあるかもしれないということです。しかも、それ1回限りで終わってもらったら困るということもあります。というようなことを感じました。

(仲野委員)

小中の連携の部分は、本当にそのとおりだと今感じました。小学校の中においても、年度初めに、給食指導の仕方やアレルギー対応の必要な子、エピペンを預かる場所などについて共通理解しています。共通理解はどの学校でもしっかりしているところではないかと思っております。

本校においても、誤食があったときには緊急で全教職員が集まり、どこにどういうミスがあったのかということを共通理解しました。それ以後絶対ないようにしようと今取り組んでいるところす。ミスをゼロにしていくということは、子どもの命を大事にするという意味において、頑張らないといけないことだと思います。校内での共有が前提であって、それを小から中に引き継いでいくということが大事だと考えます。

(鎌田座長)

それでは、2つめのほうに入らせていただきますでしょうか。12人の委員がおられますので、1人5分話していただいても60分で収まりますので、順にご発言いただきたいと思います。

植木委員からよろしくお願いいたします。

(植木委員)

今回この懇話会に参加させていただきまして、保護者の立場からということで、先生方の意見もいろいろ聞かせていただいて、勉強になることが多くありました。自分が知らなかったこともたくさんあるのですが、実際に関わってみて、もっとこうしたらなと感じるところもいろいろあります。栄養教諭の先生方のこともそうでしたし、今まで私の知っている給食というのは、ただおいしいかおいしくないかという視点だったのですが、そこには安全のことや、もっともっと深いことがたくさんあるというところで、今後中学校の給食が始まるということで、親としてそれをどういうふうに捉えていったらいいのかというのは、すごく考えさせられました。

私の個人的な気持ちとしては、せっかく堺市で給食が全員喫食になるというのであれば、一日でも早く実現してほしいというのが保護者としての希望です。そこにはもちろん安全とかもありますが、みんなが同じものを食べられるし、親としても毎日弁当を作って持たせるという負担から解放されるというところもあります。そういう意味では、一日でも早く実現できればなというのがあります。

資料の最後にあるのですが、ただつくって終わりではなくて、ずっとずっと更新していかなければならないものなので、多分ゴールはないのかもしれませんが、去年よりももっといいものをというのをスタンスでどんどんつくっていったらえればと思います。

教育に関しては、私たちはよく分からないところが多いので、専門家の先生方にお任せするしかないのですが、食育というのは本当に勉強になりましたので、それをもっともっと子どもたちに伝えていってもらって、食に関して子どもたちにもっともっと興味を持ててもらえればと思います。

(吉原委員)

感想と最後に希望だけ述べさせてもらえたらと思うのですが、今思い返すと、給食検討懇話会の第1回が始まる前に、地域の仲のいい保護者であったり地域外の保護者であったりと小学校の給食がおいしいかおいしくないかというシンプルな会話をしたことをいまだに覚えています。その中でとても難しいと思ったのは、私、試食会に行かせていただいて、給食を食べておいしいと思ったのです。でも、おいしくないという保護者も何人もいて、飲みながらしゃべっていたので、危うくけんかになりそうぐらいだったのですが、それぐらい味覚は難しいと思いました。自分がおいしいと思っても、相手はおいしくないということがあります。堺市全市で児童の数を考えたら、これは本当に難しい問題だなというのが最初の取っかかりです。こうやって、教育のプロや、食育のプロの方の意見を聞きながら、自分自身も高められたい懇話会

でした。ありがとうございました。

最後に、思いの丈というか、希望ですが、給食センターとかに関することではなくて、保護者として、もし中学校の給食が実施されるのであれば、堺市は小中併せて給食の無償化というのも1つ考えていただきたいと思います。私、娘が高校1年生になって、僕の時代は、私立は費用がかかる、公立はかからないということで、私、私立だったので、親にはとても感謝していますが、今、大阪府だと、公立、私立といったところでその差がない。そういった障害がないのは、教育の現場において子どもにとって自由な選択を与えることができるので、これはとてもいいことだと思いました。給食も、各学校園がどうしているか知らないですが、堺市は政令市で人口も多いですし、給食費用が障害になって学校に来られない、きっと真面目な人ほどそうになってしまうと思いました。食べるということは生きることなので、成る成らないは別として、思いの丈というところで、中学校が実施されたタイミングで、小中併せてぜひ無償化を検討していただければと思います。

皆さん、どうもありがとうございました。

(仲野委員)

私は、毎回この会で栄養教諭の先生方が非常に熱い思いを持ってしっかり語られるのが一番の印象でした。食を通して子どもを育てることについて、食の安全、食の豊かさ、ほかの先生たちとの連携、あるいは管理職との連携、同じ栄養教諭さん同士の連携、いろいろな中で頑張っておられるというのを一番感じました。この先生方がいたら安心だと思うところです。私自身は、堺の給食がとても気に入っている人間で、今日もおいしいスパゲティのナポリタンを食べて満足をしています。調理も非常に工夫してくださっています。安全面ということであれば、毎回検食のときに調理員さんの衛生管理が大丈夫かなど、細かいチェックリストの提示がありますので、気をつけながらこのおいしい温かい給食を作ってくれているということに、本当に感謝しています。

給食センターということになりますが、それはそれでいい施設で、きっとすばらしいおいしい給食を作ってくくださるようになるのではないかと考えております。食を通して体づくりをし、心を育て、豊かに生きていける。AIの時代になっても、やっぱり食を大事にしながら、血の通ったというか、そういう人間教育ができるような堺市の学校給食になったらいいなという思いを持っております。

(石山委員)

先ほども少し申し上げたのですが、いろいろとありがとうございました。私自身、本当に勉強になりました。給食の無償化のことを吉原委

員から言っていただいて、私もそのことは懇話会の途中で言わせてもらったことがあるのですが、いいタイミングでぜひともやっていただきたいと思っています。栄養教諭の先生ともこうやってお話しさせていただいて、学校の方にいろんな研修で来られたときにお会いしてお話しさせていただいたり、何か困ったことがあったらすぐ聞ける。そのような関係作りができて、本当に良かったと思っています。

言いたいことはいろいろあるのですが、最後に、勢戸委員や田中委員、鎌田委員にはぜひとも給食が始まるまでに、堺市で講演会とか講習会をいいタイミングでしていただきたいと思います。鎌田委員からのチームでどんな学校にするのかと聞かせていただくたびに、背筋が伸びておりまして、振り返る機会にもなりました。ありがとうございました。

(中村委員)

私も、この会に参加させていただきまして、本校は栄養教諭の配置がないのですが、食育の大切さというのを一番感じたところです。校長として今までここにそんなに力を入れていなかったといいますか、その辺が少し恥ずかしいというのを、この会に出て感じているところです。鎌田委員が生きてさえいればと、生きるというキーワードをおっしゃったのですが、まさに生きるというキーワードと直結するのが食育になると思います。学校教育の中で、食育を抜きにして今まで何をしていたのかというようなぐらいの印象を持って、本当に不勉強だったと反省しています。

前にも言わせていただきましたが、私は以前弁当派だったのですが、毎日、給食を検食しないといけないということで、食べ始めて、今は給食派になりました。何ととっても私、牛乳が大好きですので、毎日出る牛乳とたまに出るデザートのおいしいこと、デザートがある日を献立表が来たらまずチェックをして、その日だけは出張を入れないようにという感じで、給食を楽しみにしています。実は、来週懇談が始まりまして給食がなくなるので、家へ帰って、「来週から弁当がいる」と言ったら嫌な顔をされましたので、それを思っても、給食はいいということを家庭の中でもっと広める必要があると思っています。学校の職員にも弁当派、給食派がいるのですが、給食派をもっと広げていきたいと思っています。ありがとうございました。

(池田委員)

先生方、保護者の皆様、ありがとうございました。ここでいろいろなお立場からのご意見を聞かせていただいて、私も大変勉強になりました。先ほどアレルギーのことが出ていましたが、振り返ってやっぱり最後は人だということを私は感じました。今日の資料の、給食センターに関

することの2つ目の丸のところで書いてくださっているのは、私が思ってお伝えしたことです。アレルギーのことを安全にするのは、やっぱり私たち人です。逆に、ミスをしてしまうのも私たち人です。また、そのミスが起きたときにどう対応するかというのを訓練しておくのも人です。なので、いざというときにみんなが力を合わせられるチームワークを、日頃から作っておかないといけないと思います。いざというときに力を発揮できるのは、日頃のチームワークだと思います。除去食においてもそうですし、給食場の日々の調理においてもやっぱり人だと思います。

中学校給食において、アレルギーのことも、給食場のことも、堺市はきちっとしたマニュアルを作ってくれていると思っています。小学校には、今も、きちっとしたマニュアルがあります。でも、それも守るのはやっぱり人なので、いくら良いマニュアルがあっても、守らなければ何の意味もありません。そこをきちっと守っていく人に私自身もならないといけないし、一緒に働く人たちもそういうふうにやってもらえるようにしていかないといけないと思います。もちろん、学校の中の先生たちもそれをちゃんと守る。子どもたちの命を守るために、日常自分たちが決められたことをちゃんとやる。そういう体制を作っていく。人間関係を作っていくというのが大事だと思います。

センターの運営整備は、建物の整備だけではなく、その運営についても、委託するという一文が実施方針の中にありました。立派な建物があって、きちっとしたマニュアルがあって、そこで働く人がそれを大切に守ってやっていく。志高く、堺市の給食はいいものを作っていく、安全なものを作っていくというふうに働いていくのが大事だと思います。そうしていく中で、私たち栄養教諭は、食育を通して子どもたちの心と体を育てていく。食べ物が体を育て、食べ方が心を育てるというのは、食育が担っている大きなところだと思うので、そこを私たちはこれからもしっかりやっていかないといけないと、この会で改めて思いました。これから頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

(苅野委員)

1回目から私たちの仕事に対して、すごく理解していただくような意見があったので、私も自由に発言してきたのですが、自分の仕事を話をしてみると、思っているよりも自分の仕事が好きなのだな、熱く思っているのだな、というのを再確認させてもらったと思っています。

栄養教諭の全校配置というのを私も言わせてもらったのですが、冒頭のアレルギーの話で、栄養教諭がいるから誤食がないというわけではないのです。堺市でも、配置されている学校で実際誤食が起こってい

ます。そういうことを担うための全員配置という意味で私は言ったのではなくて、食育を堺市で底上げしていくためにやりたい。仲間を増やしてほしいという意味での全校配置でした。でも、実際ニーズとされているのは、そういう事故が起こらないとか、そういう人が必要ということのほうで、校長先生たちは今望まれているというのは思うのですが、やっぱり仕組み作りがなければ、私たちが配置されていても絶対事故は起こります。だから、校長先生のリーダーシップのもと、未配置であろうが配置であろうが、そういうことを常々教職員全員に周知することをお願いしたいと、今日強く思いました。

やっぱり子どもも育てないといけない。6年間で、あなたはこれを食べたら症状が出るのだから、自分でちゃんとと言わないといけない。配膳されるのを待っていたら、いつ事故が起こるか分からないし、大学生になって、自分で食事を選んだり、「調子が悪くなったら、かばんに入っているエピペンを打って」と友達に言えないといけない。そういう子どもを小中を通して育てていく。本人を育てるということもすごい大きなことだと思っていて、そういうことができたらいいいと思っています。

前々回、月見献立の話をしてもらったのですが、今日も冬至献立ということで、『カボチャのうま煮』が出ました。うちの学校に届いたカボチャはオレンジではなくて黄色いあまり熟れていないようなカボチャだったので、味付けが少し難しいかなと思ったのですが、調理員さんは甘味を調味料で足して、すごくおいしく作ってくださったのです。残量を見てきたら、子どもたちは割としっかり食べていたので、子どもたちにもそういう思いが届いたと思います。そういう配慮だったり、カボチャの外の皮に傷がついていたら口当たりが悪いのですが、そういうのも調理員さんはしっかり取ってくれたりする。「このカボチャで子どもたちがカボチャ嫌いになってはいけないと思って丁寧に取らせてもらっています」ということをいつもおっしゃっています。そういうこともどんどん伝えていって、おいしく食べられる人は自分を大事にして、人と楽しく食べられる人は人も大事にできる人だということをいつも挨拶で言わせてもらおうのですが、そういう子どもに育てていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

(富永委員)

今年中学校に代わったのですが、中学生のお昼ご飯を、クラスの方に行って見ておりますと、パンやおにぎりだけという子もいます。中学生は、成長期で、すごくたくさんの栄養が必要な時期なのですが、必要な量が足りていない子どもたちがたくさんいることが気になります。家庭科でバランスよく食べる大切さについて、子どもたちに伝える時に給食を見本にしたいのですが、今の選択制給食はみんなが食べていな

いということで生きた教材にできないというか、その辺すごく難しいと思うところもあって、全員喫食が堺市で始まるということのを心待ちにしています。全員が給食を食べることで、栄養バランスのことだけでなく、今小学校でも言われたように、「今日は冬至だよ、だからカボチャが出るんだよ」というのを子どもたちに伝えられる。子どもたちが家に帰って、「今日は冬至なんや、家でもカボチャやん」という、そんな家族とのやりとりがあるというのが子どもたちの心を豊かにするということで、本当に給食は大切なものだと思います。今からまだたくさん準備をして、先生方も保護者の方も安心して全員喫食を始められるようにしないといけないと改めて思う会になりました。ありがとうございました。

(八竹委員)

1回めからずっと参加させていただいて、長年仕事をしてきましたが、給食とか食育について突き詰めて話し合いができたのは、今回が初めてだと思います。もちろん、小学校に勤務の際は、献立委員会で保護者の方に出させていただいてご意見をいただいたり、物資購入委員会でも保護者の方とお話しする機会があったのですが、こんなにじっくりと自分の思いを伝える場面が今までなかったので、とても良かった。こちらが思っていることを試食会でも伝えることはあったのですが、実際保護者の方たちがどのように考えられているのかということ聞かせてもらう機会は今回初めてだったと思って、とてもいい経験をさせていただきました。校長先生方の思いも聞かせていただいて、これからの給食に反映させていくのにも勉強になりました。これが終わりではなくて、常にそういうことを意識して、皆さんがどういうふうと考えられているのかということ聞きながら、「ゴールがない」とおっしゃっていたのですが、ハード面はでき上がってしまったらそんなに修正はしていけないですが、ソフト面に関しては、聞きながら、コミュニケーションをとりながら、どんどん修正していけるということも分かりました。それを意識しながらやっていきたいと思っています。

最初のほうで、アレルギー、除去食についてマイナス面の意見を少し言ってしまったのですが、逆に中学校給食で全員喫食ということでプラスの方に考えていく。アレルギー対応の小中連携も今まで選択制給食だったので十分にできていないところもありました。もちろん聞き取りもちゃんとしていますし、基本的な事項はあったのですが、毎日、全員が給食を食べていないから、修学旅行での食物アレルギー対応の時に、急に生徒に症状を詳しく聞かないといけないみたいな感じになっていたのが、これから毎日給食を実施していくのであれば、それがちゃんと途切れず続いていける。子どもたちにも食育ということ

通じてやっていけると思っているので、プラスに感じながら、富永委員が言っていましたように、始まるということをわくわくしながら、今課題となっていることをプラスに変えてやっていけたらいいと思っています。本当にありがとうございました。

(鎌田座長) それでは、いろいろとご助言いただいたお二人の先生、まず、田中委員、いかがでしょうか。

(田中委員) まず、保護者の方、校長先生方、実りのある意見交換ができたので、非常にうれしくて、聞いていても気持ちよかったです。ありがとうございます。お礼ついでにもう1つ、食育にやる気を出してくれた市長に感謝しまして、ぜひそのやる気をなくさないように言っていただきたいと思います。教育の基礎は食育にあるという感じで、まず事務局と市長にお礼を言いまして、次の話に行きます。

まず、給食センターですが、1回目か2回目に勢戸委員が8項目衛生管理のポイントをおっしゃいましたが、ぜひあれを1つも漏らさず実現していただくということをお願いしておきたいと思います。

それから、そこで働く人員、スタッフですが、ぜひ適切な人員を選んでいただきたい。直営でやるのか、委託でするのか分かりませんが、委託するのであれば、例えば20人で働いていて、誰か体調不良とかで、1日だったらいいのですが、1週間ほど休むとかになりますと、きちんとした業者ですと、初日は仕方がないとしても、2日目からは他から呼んできてスタッフを揃えます。少しのんびりした業者ですと、1週間マイナス1のままでやります。そうすると、働いている方には負担がかかり、ミスの原因になりますので、業者の選定のときに、ぜひきちんとした業者を選んでいただきたいと思います。私のところの学生は、管理栄養士を取って就職する際、「この会社はブラックや」、「この会社はややブラックや」とか振り分けて行っておりまして、それは風評でやっていますから正しいとは限りませんが、業者選定するときはそういうようなところもちゃんと詰めてやっていただきたいと思います。

それと、予算なのですが、病院の場合は1食640円が病院の収入になります。人件費も全部含めての話ですが、大阪府は従来そのうちの35%を食材費に使いなさいというような指導がございます。言いたかったのは、お金がないと作れないのですよ。その辺も考えて、献立を作るときに、物価が高騰しますと、200円と決まっていっても200円でできなくなってきましたよね。一定のレベルのものを提供するため、その辺は変動制の考えをもって、特に全額市負担とかになりましたら変動制をとりやすいと思いますので、もし全額市負担のときは変動制のよ

うな予算の考え方をしていただけたら、より子どもさんが喜ぶかと思
いますので、よろしくお願いします。

あとは、食育ですが、私の希望は、栄養教諭さんはできれば保育所か
ら始めてほしいと思います。保育所に勤めて、小学校に勤めて、中学校
に行く。中学校まで行ったら、小学校に戻ろうがそれは自由ですが、全
部体験しておいていただきたい。それで食育の流れがつかめます。1週
間行ったというのではなくて、年単位でやっていただければ、小学校を
経験して中学校へ上がれば、小学校の流れが全部分かっていますし、子
どもの考え方も常にとらまえていますので、ぜひそうしていただきた
いと思います。

また、マニュアルをしっかり作っていただくというのは非常に大事
ですので、そういう意味では、給食の業者さんがもし入るとすれば、前
にも言いましたが、ISO9000シリーズを取っている会社を選ん
でいただきたいです。そうすると、マニュアル化がしっかりしたものが
できます。あれを取りますと、年に何回か中でチェックしたりしていま
すので、選定するときにそういう会社を選んでいただければいいかと
思いますので、お考えいただければありがたいと思います。

非常に実りのある会だったと、今でもひしひしと感じますので、ぜひ
この会での結論を漏らさず実現していただきたいと、それが思いでご
ざいます。

(勢戸委員)

いろいろあるのですが、とりあえず中学校給食の懇話会なので、堺市
は中学校給食を正式にはやっておらず、ゼロからの出発なので、建物が
要りますし、予算も含めて準備期間は結構あると思います。いろんなア
ドバイスができる管理栄養士の先生もたくさんおられるので、きっち
りいいものができてくるのではないかと考えております。

私は、本来は衛生管理の方の助言者なのですが、文科省で食育もさせ
られます。なぜさせられるのかと思いながら、調査官に「私は衛生管理
の方です」と言うのですが、「食育は大人がみんな関わるもので、栄養
教諭だけがやるものではない。だから各学校に食育の先生を置いてな
いでしょう。だから、先生は衛生管理の助言者だといっても食育も重要
だ」ということで、もう10年ぐらい食育にも携わっているわけです。
でも、僕は細かいことをやっているわけではなくて、食育をどうやって
まわしたらいいかというのに携わっているだけなので、的確な指導は
できません。今も言ったようにみんながやらないといけないというこ
とがありますので、学校の先生だけではなくて、教育委員会もみんなし
なければいけないわけだし、子どもに対して大人がみんなそういう概
念でやっていかないと、最終的に食育というのは完成しないものの

で、特に学校では頑張ってもらいたかったということも思っていたら、前回教育委員会の方で「任せてください」という話だったので、すごく安心しております。

実際、給食センターができれば、運営とか、契約も含めていろんな書類ができてくると思いますが、細かいマニュアルも含めて、役所のそういうマニュアルは見直す必要があります。私は、今も言ったように衛生管理が専門です。調理場には各調理場の衛生管理マニュアルがあり、それに関しては必ず毎年3月末で見直す必要があります。見直して、修正がなければ、なかったというのを書いておけばいいだけなのです。さっきアレルギーの話で、平成25年度からマニュアルを作成しているということだったのですが、必ず見直しをしておく必要があります。

毎回きつい発言をしています。何年か前に今の選択制給食を始める際に堺市の事務局から相談を受けたこともあり、以来、私自身も、堺市の給食には思いがあって、安全でおいしくていいものを提供していただきたいと思っておりますので、今後も頑張ってください。

(鎌田座長)

委員の方々のご発言を聞きながら、感情面で言えば胸がいっぱいになるといいですか、例えば冒頭植木委員がおっしゃいました「ゴールはない」というお話。「もっとよく、もっとよく」と。それから、吉原委員に至っては「自分を高められた」とおっしゃった。こういう発言が全ての委員から駅伝をやっているみたいにつながっていく。そういう発言が続く。そういう、この懇話会に参加できて、幸せだったと思います。

「日本一安心、安全な給食を」の堺市は、同時に「日本一あたたかくておいしい給食を」ということにしていっていただけですが、我々懇話会は、給食の話をしながら教育の話をし、教育の話をしながら給食の話をし、給食の話をしながら人を論じて、人の成長を大事にしてきたという面が大いにあると思うので、これからの堺市がすごく楽しみです。栄養教諭さんがわくわくしているわけですから、こんな楽しいことはない。吉原委員の言われた自分を高めるという言葉は自分自身も大事にしている言葉なのですが、ある日、懇話会が終わったときに、エレベーターの前で集まっておられる栄養教諭さんを見たときに、それまでの栄養教諭さんと違って見えました。急にしっかりしたというか、凄味を増したというか、そういうようなことが校長先生の中でも、保護者の代表の方の中でも起きてきたのがこの懇話会だと思います。それは、子どもたちのために頑張ろう、一肌脱ごうという熱い気持ちを集めていただいたからだと思います。

そういう点では、田中委員が言ってくださった幾つかのこれから頑張

ってほしい、クリアしてほしいことは僕も全く同意見です。だからこここのところはしっかりやっていってもらわないといけません。そうすれば、日本一安心、安全でおいしい給食をめざしている堺市が、日本一の教育の堺市になり、日本で一番住みやすい町堺になる。これは卵と鶏の関係だと思います。どれもつながっていて、一個すごければ、どれもいい線いけるというふうに思いますので、本当に楽しみです。これからの堺市の発展を心から期待をしております。

3. 挨拶（田所教育次長）

4. 閉会